

光明

こうみょう

新春

第225号

弘法大師御誕生千二百五十年 正当年

特集1 弘法大師御誕生所

特集2 お大師さまの伝えた筆

新連載 弘法大師に学ぶ

しんごんしゅうぶざんは
真言宗豊山派

自身の中にも 仏になるための心がある



真言宗豊山派第三十四世管長
総本山長谷寺第八十八世住持
浅井侃雄

——新年、あけましておめでとうございます。
檀信徒の皆さまには、健やかに新年を迎えられ
ましたこと、謹んでお慶び申し上げます。

本年は、弘法大師御生誕二二五〇年の記念の年
です。豊山派ではこれを祝し、令和4年6月15日
に、総本山長谷寺の御影堂みえどうにおいて総登嶺開白法
要ようを行いました。この法要の日から、今年の大晦日、
12月31日を結願けつがんとする記念事業を行っています。
それぞれのお寺の団体参拝や各支所の総登嶺など
で、ぜひとも長谷寺にお参りください。

そしてお参りの際には、十一面観音さまがいらつ
しゃる本堂（観音堂）はもちろんのこと、その先に
ある、お大師さまが祀られている御影堂にもご参
拝ください。お大師さまとも深い縁を結んでいた
だくこと、これが私の一番の願いです。

コロナ禍などさまざまな事情により、残念なが
ら長谷寺に参拝することが出来ない檀信徒さまも
多いかと思いますが、平安時代以降、全国の皆さま
が遠くから長谷寺の観音さまやお大師さまを念じ、
信仰を続けてきました。直接足を運べなくとも、長
谷寺の観音信仰、そしてお大師さまへの信仰を大
事にしていただきたいと思います。

——私は、長谷寺の山内にある慈眼院じげんいんという場所
に住んでいます。朝起きてまず行うのは、慈眼院の
本尊である十一面観音さまへのおつとめです。朝
食後には、大講堂の本尊阿弥陀如来さまの前で修
法するのが日課です。時々山内を周り、諸堂の参
拝もいたします。山の自然に四季の移ろいを体感
することは、この上ない喜びです。長谷寺に住むと
いうことは、仏さまと生きることですが、それに加



えて、自然と共に生きるのは、実に素晴らしいです。
本山での日常生活では、筆をとり、書き物をする
ことに時間を費やしています。書くものは色紙や

光明

目次 新春
第225号

01 | 管長猊下のお言葉

05 | 特集1

弘法大師御誕生所

—真言宗善通寺派総本山善通寺—

13 | 『般若心経』やわらか手引き
まかはんにゃ〜⑤

15 | 新連載
弘法大師に学ぶ①

17 | 特集2

お大師さまの伝えた筆

25 | 長谷寺学芸員に聞く

29 | 仏教童話⑬⑭
油の鉢

33 | 仏教はじめてヒストリー⑩

35 | ヘルシーうれしい 精進料理⑳

37 | なるほど仏事のQ&A④

38 | こうみょうパズル



表紙写真
総本山長谷寺蔵 稚児大師像



今年は弘法大師御誕生1250年です

半切など、皆さまに差し上げる記念品です。さまざまなものに揮毫し、落款を押し、一人で作り上げています。受け取って頂いた方々に喜んで頂くのが、何よりの喜びです。正直、一年で何百もの染筆を残すのは大変ですが、大事な仕事だと、一枚一枚、丁寧に書いています。

色紙にしたための「佛心」は、漢字二文字で書くこと難しく見えますが、「仏さまの心」という意味です。仏さまの心とは、如来や菩薩さまの心だけではありません。我々自身の中にも、仏になるための心がある、ということなのです。そして誰もが、自分の中の「仏さまの心」に気付けば、仏さまになることが出来るということです。もっとも、それが一番難しいことではありませんが、皆さまもご自身の中の「佛心」をみつけていただきます。ありがとうございます。

——最後になりますが、最近では、毎年のように気候変動の影響を疑うような災害が続いております。今年はどうか災害のない、穏やかな一年であって欲しいと思います。また、世界で起きている争いや、コロナ禍が一日も早く収束して、人と人との関係が以前



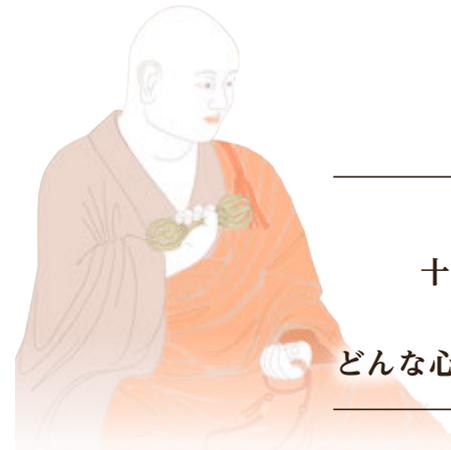
総登壇開白法要の様子

のようなお互いを思いやる気持ちに戻り、平安な世の中になることを、心より願っております。

弘法大師に学ぶ

【相談】

この度亡妻の
十三回忌をするつもりですが、
丸十二年もたっての法事、
どんな心持ちで臨んだらよいでしょうか？



【回答者】平井宥慶

真言宗豊山派総合研究院 前院長
大正大学名誉教授／東京 常泉院住職

誕生日は忘れても、命日は忘れないものです。ともに歩みし奥さまとの別れ、大師は「去り易く留まり難きは恩愛の香しき中なり」（大師の言）と、ともに歩んだ情愛の日々は、愛の深ければ深いほど早うに過ぎてしまったように感じられるものです。と。大師もたくさん法事を引き受けております。そのとき唱えた表白文（願い表明）が残されているのです。そこをヒントに頂きましょう。

さて法事は、その奥さまと再び邂逅する機会、これがまず法事をする第一の授かりごとでありましょう。だいたいに法事を催すには、今日の明日に出来るものではなく、一年前、いや二年くらい前からもう心がけておかねば執行できないものです。私の経験（私の場合

は母でしたが）から申せば、その間じゆう、傍に奥さまが居るとき思いに浸ることになりましょう。まさに邂逅です。

そして大師は「病患の怨を堆き、身を全うするを得んが為に」と指摘します。若し病によって奥さまを失ったとすれば、その病を恨むことに想いが至ることにもなりましょうが、今過ぎ去った丸十二年という現実を確実に認めなければならぬ。命日の今日に立ち、これまで生きて来られた十二年、この中で現実的に想いを及ぼすことによって「身を全くする」、今日までと同じように明日からも歩もうとする自分をリセット出来る、明日からも生きねばならない「元氣」を頂ける、これが第二の幸いごとです。

このリセット「元氣」は、これから何か起こるかもしれない悪しき事どもにも果敢に立ち向かえる「元氣」、言うなればまざまざと思

出された奥さまと乗り越えてきた日々という思い出に繋がります。う。あのとき切り抜かれたのだから、亡き妻に見守られているいま切り抜けれないはずがない、という確信の元氣です。大師は「未だに悪趣を脱れて、解脱の身を得んが為に」と。わたし等凡人は「解脱」とまでは言えないまでも、何方にでも見られる「元氣」ならば、理解できます。

リセットによって暫し立ち止まり若干の物思いにふけることが可能、ということ、平たく言えば人生の反省、これは少々でも人格の発展を期すことが可能、ということではありませんか。亡き奥さまのお陰で人身向上がみとめられ

る、これは第三のご利益といえましょう。

以上「一切の三宝に供養する」。供養するとは、瞬時おのれを無にする、ということ。これを妻とともに仏さまとご先祖さまにまで無の心でお祈りする、そのとき自らの生を授けてくれた母、父にそして先祖に感謝の気持ちで湧く、のではないのでしょうか。この世に生きることで、好きな音楽に浸ることが出来た、お酒の好きな人はお酒を、芝居の好きな人はあらゆる舞台が臨けられた、旅に情熱を傾ける人は世界を回ることが、よくぞ産んでくれたとつくづく思うことと存じます。これに気付けることが第四のご利益、と申せます。

世の中、争いごと無く、平々凡々と過ごすことが出来れば、これに越したことはないと思えます。で

も、明日はどうなるか、は誰にも予測できません。それでも「明日」はきます。それでわたくし達に何が出来るのかを考えたときに、無窮の神仏に今の瞬間だけでも至心の気持を捧げること、そこから安寧の心持ちを頂ければ、これも第五のご利益となりましょう。

かくて法事は「二所の御霊等の為に資し奉らむ」と。身内のご法事はあの世の御霊が大変喜ぶことでもあり、と。これを想像することのできる人は、この世での存在が周囲から信用され、人格ますます大きくみられる、というのです。これぞ第六の功德です。

真心を以て法事執行、真心は地球よりも重い、ひとさまに解ってもらえるのは、せいぜい当日の御もてなし、出来る範囲で即時実行、が肝要です。あらためて亡き人のご冥福をお祈りいたします。

「三蔵法師」

— 玄奘 —

冒険小説に登場する僧といえば……

孫悟空が活躍する『西遊記』。そこに登場するのが、三蔵法師です。そのモデルになったのは、中国が唐と呼ばれた時代に多くの経典を翻訳した玄奘（602～664）でした。

『西遊記』の三蔵法師を、わが国のドラマで演じたのは、夏目雅子さん、宮沢りえさん、深津絵里さんです。そのせいか、玄奘もまた清楚で華奢だと思われがちですが、実際は身長2メートルの大男でした。屈強な体と不屈の精神の持ち主だからこそ、歴史に名を残したのです。

27歳の玄奘は、仏教のさまざまな疑問を解くため、インドへ旅立ちました。鎖国の時代であっ

たことから、国の法律にそむく許されない出国です。

灼熱のタクラマカン砂漠を進み、極寒の天山山脈を越えるなど、命をかけた旅が続ききました。幸いにも無事にインドへ着いた玄奘は、仏教学の最高峰とされるナーランダー寺に留まります。仏教の本場で本格的な学びの場を得た玄奘は、抜群の語学力を駆使し、異国の僧でありながら僧院の第一人者になりました。

学をおさめた玄奘は、膨大な経典をたずさえて帰路につきます。絶大な信頼を寄せるインドのハルシヤ王は、護衛を付けてくれました。往復6万キロの旅の末、17年の歳月を経て、玄奘は唐の都の長安へと戻ります。太宗

皇帝は、玄奘の輝かしい業績に感嘆し、密出国の罪を問うことはありませんでした。

玄奘は、インドの仏典を、次々に中国語に翻訳していきます。その数は、なんと1335巻にのぼりました。わが国で最も読まれている『般若心経』や、大音声で唱えることで知られる『大般若経』600巻は、ともに玄奘が訳したものです。

教えが説かれた「経」、戒律をまとめた「律」、経や律を注釈した「論」。その三つに精通した僧を、三蔵法師と言います。三蔵法師は尊称であり、特定の人物を指す言葉ではありません。

多くの三蔵法師のなかで、玄

奘の功績は群を抜いており、その史実をベースにして、娯楽の要素をたっぷり加えてできたのが『西遊記』です。中国に限らず、広くアジアの人々に親しまれた三蔵法師は、玄奘が最初で最後でした。いまでは、三蔵法師が、玄奘の代名詞になっています。